

本書のタイトルに用いられている「特別な関係」とは、米国とタイ軍部との特別に親密で相互依存的同盟関係のことである。その特徴は米国がタイ軍部の政治介入と抑圧傾向を強化し、一方、タイ軍事政権は米国の秘密作戦にまで全面的に手を貸して、米国に利益を与えるということにある。本書導入部の記述から著者は「特別な関係」は1947年に端を発し1980年代まで継続していると理解しているようである。「特別な関係」を著者が、タイがインドシナに派兵し、米国が膨大な軍事援助を腐敗して非効率なタイ軍部に注ぎ込み、タイが数万人の米軍の駐留を許し、また、米政府は抑圧的なタイ軍事政権を支援したことを例に挙げて説明しているように、著者の「特別な関係」論は主に58年以降のサリット・タノーム時代のタイ・米関係の実態を一般化したものである。

ところが、本書は「特別な関係」の最盛期でありタイ史におけるアメリカの時代であった60年代は直接の対象とはせず、その創始期と著者が称する47年からサリット革命の58年までの12年間を対象としている。著者はこの創始期に73年まで続く軍事政権の形態が造られ、外交政策も従来の柔軟性を失い米国との同盟に転換し、また、政府は次第に閉鎖的抑圧的性格を増したという。

著者はタイ米関係について自らのアプローチを既存研究と対比して、既存研究は冷戦モデルにとられ過ぎていると批判する。彼の批判では冷戦モデルは、両国関係を共産主義に対する安全保障という観点からしか視ず、そのため国際関係と国内政治とを切り離して国際関係面のみしか考察しないところに欠陥がある。冷戦モデルでは共産主義の脅威という国際的状況からタイは軍事政権であるか、民主政権であるかを問わず、米国との同盟を強制されたという前提から出発するので、タイの国内政治や政治形態がタイ米関係に与えた影響の重要性を見落とし、同時に米国がタイの国内政治に介入して操作したという側面を無視することになったというのである。著者は弱小国たる1940-50年代のタイは外部の圧力に弱く、米国からの圧力によって反政府派や少数民族への抑圧が強化され、また脆弱な政治基盤しかない軍人支配者が政権安定のために米国からの支援に依存しよう

としたと指摘して、タイ指導者自身の頭の中においても内政と外交は分離されていなかったと主張する。それ故に著者はタイ米関係の研究においてはタイ内政と対米外交との間の緊密な相互依存関係、すなわち「特別な関係」を実証的データに基づいて明らかにする必要があると説くのである。評者の見るところ、本書で紙数の半分を費やしている1947年から著者がタイ外交政策の革命の年という1950年までの記述においては、アメリカとクアン・アパイウォン政権やピブーン政権との関係について、既存研究にはない新事実が数多く提示されている。また、50年代のラオスに対するアメリカとタイ政府の諸政策も評者にとっては新知識であった。

ところで、著者は「特別な関係」論で47年から58年を首尾一貫して説明することに成功しているだろうか。評者は本書も相当のスペースを割いている55年以降のピブーンのアメリカ離れ・中国との関係改善外交や民主化政策を「特別な関係」で説明することは不可能と考える。60年代のタイ米関係の実態から一般化した「特別な関係」モデルを、無条件にその前の時代にまで遡って適用したことには元々無理があったと思われるのである。本書の理論的枠組みの有効性にはこのような疑問が残るが、本書の価値は、アメリカの影響力が最も強かった時代のタイ米関係を地の利を生かして徹底した資料調査を行い、実証研究として飛躍的に深めたことにあると考える。

(村嶋英治・早稲田大学大学院アジア太平洋研究科)

Eleanor Laquian; Aprodicio Laquian; and Terry McGee, eds. *The Silent Debate: Asian Immigration and Racism in Canada*. Vancouver, B.C.: Institute of Asian Research, The University of British Columbia, 1998, xx + 432p.

本書は、カナダ・バンクーバーのブリティッシュコロンビア大学アジア研究所 (Institute of Asian Research) が、1997年6月に主催した国際会議の内容を収録した論文集である。カナダはいわゆる移民国として、移民の受け入れを政策的に推進し、多文化主義政策をとる国である。だが、同国にお

いて、アジアからの移動者・移民の数が近年増加しており、しかも、多くの者が高度な専門性・技術や資本を持っていることから、カナダの人びとの間に、揺り戻しといった形で彼らに対する違和感、差別意識が広がっている。このアジアからの移動者・移民に対して、どういった形での対応が可能であるのか、その現状と課題を討議しようとしたものが本書であるということができよう。

本書の構成や収録された論文からは、アジア研究所が、カナダの状況を、現在の世界の状況のなかで重層的に理解しようとするねらいが見えてくる。カナダにおける古くて新しい「レイシズム」を考察するにあたって、移民の多い市のケーススタディをとりあげた論文、カナダの移民政策に関する検討を行った論文が収録されている。また、送り出し側であるアジアの状況に関する論文、他の受け入れ国の移民への対応を取り扱った論文も、比較の視点から全体の構成のなかに織り込んでいる。現在の人の国際移動を理解し、具体的な方策を講じていくためには、ローカル、ナショナル、インターナショナルの3つの視点が重要であることが、本書でも改めて確認されているように思われる。

こうした試みは、東南アジア地域の状況分析にとっても示唆的であろう。本書所収の論文、アジザー・カシム「東南アジア域内の人の移動 (Intra-regional Migration in Southeast Asia)」でも指摘されるように、現在東南アジア域内では、シンガポール、ブルネイが主要受け入れ国、フィリピン、インドネシアが主要送り出し国、マレーシアとタイが受け入れ国と送り出し国の両方の性質を持つに至っている。東南アジア諸国の人の国際移動めぐり、各国別の政策・状況記述ないしケーススタディは多く、アジザーの論文もそのレベルに留まっ

ているが、今後の東南アジア諸国、地域の将来を見据えていく上では、これらを結び付けた重層的な問題設定・分析が必要とされていくだろう。

また、現代のディアスポラという観点から興味深い論文は、ロナルド・スケルドンの「多文化主義からディアスポラへ (From Multiculturalism to Diaspora)」である。ディアスポラという言葉は、国外移住、国外離散を意味し、元来の用法では、ディアスポラの状況にある者は故郷から難を逃れて移動した被害者であるといったニュアンスが強かった。しかし、スケルドンは、現代のディアスポラ状況にある移住者のうち、高等教育を受け、財力の豊かなアジアからの移民、特にエスニック・チャイニーズ、インド人をとりあげ、彼らをもはや被害者ではなく、ローカルな、またリージョナルな経済の担い手となるグローバル・エリートとして位置づけている。彼らは、自分の出身であるアジア諸国・地域とのつながりを持ちつつたとえばカナダに拠点を置くのであって、これは、カナダに移住し、完全に定住する者を前提とした多文化主義に、新しい展望をもたらすものであるだろうとスケルドンは指摘する。

東南アジアにおいて、華人、インド系住民は、カナダよりはるかに長い移住者としての歴史を持っており、カナダのディアスポラには東南アジアからさらに移住した人びとも含まれる。こうした「旧」ディアスポラとカナダの「新」ディアスポラの関係と、それがカナダの多文化主義に与える影響についての考察は興味深いものになるだろう。また、東南アジア諸国における多文化主義の可能性を考える上でも、こうしたディアスポラに着目した指摘は参考となるのではないだろうか。

(石井由香・津田塾大学国際関係研究所)